

【講演会】

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ

— 仏教世界観を美術から読み解く —

宮 治 昭

ご紹介いただきました宮治です。私はインド・中央アジアの仏教美術を専攻していますが、近年は少し幅広く、仏教美術をインドから何とか日本までつなげ、中央アジアから東アジアへの伝播や変化の様相について考えております。それで今日は、「生死輪」、あるいは「六道輪廻図」といった方がわかりやすいかもしれませんが、そのお話をしようと思います。「生死輪」が「観心十界図」というものに、中国では変わっていきませんが、そうした広くは仏教世界観といえるものを美術から読み解いてみようという試みです。

それでは、今日お話しするあらすじを申し上げます。生死輪というものがインドで成立し、チベットで流行します

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

が、その流れが中国・韓国・日本へ伝わっていきます。生死輪が観心十法界図（かんしんじつぽつかいず）、あるいは単に観心十界図（かんしんじつかいず）とも言いますが、そういうものに変容する、その様子を特に中央アジア・中国を中心に見てみます。そして、それが日本の六道絵と融合しつつ、観心十界図に変わっていくというお話です。

一、アジャンター石窟の生死輪

生死輪というのは、実はインドでかなりつくられたと思うのですが、残っているのは、有名なアジャンター石窟に一つだけ現存しています。第17窟という石窟です。これはヴィハーラ窟、僧院窟ですが、その入り口を入った左手の



図1 アジャンター第17窟 生死輪

廊下の奥に、残念ながら下方が半分以上欠損しているのですけれども、そこに生死輪を描いた壁画があります（図1）。

このアジャンターの第17窟とこののは、この地域を治めていた西ヴァーカー

タカ朝のハリシェーナ王に仕えていた大臣（この地域の王）によって寄進されたことが銘文からわかり、五世紀の第4四半期の制作と見られています。

生死輪というのは、生きとし生けるものが悟らない限り、永遠に五道もしくは六道の苦しみの輪の中を経巡るということを表した円輪、車輪の図です。真ん中に車軸に当

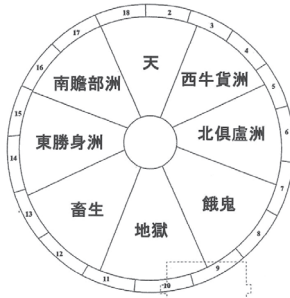
たる轂こしがあり、それから放射状に線が延びて、いくつもの区画に分かれています。下半分は不明です。

生死輪は、上に無常大鬼という鬼が、この輪をかんだり、あるいは手足で抱え込んでいます。この輪の中に入れられ衆生は封じ込められています。どうしてかと言うと、真ん中の轂に当たる中心の小円内に、死んだり生きたりする、輪廻の原因になっている三つの苦しみの原因、「貪・瞋・癡」の三毒と言うのですが、「欲望・怒り・無知」を表す鳩・蛇・猪を描いて、その三毒が迷いの苦しみの世界である五道（もしくは六道）を生み出しているのだということを示しています。

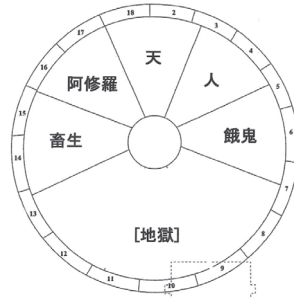
この生死輪については、いわゆる「経」の中には出ておらず、「律」文献である『根本説一切有部毘奈耶雜事』（卷第十七）と『根本説一切有部毘奈耶』（卷第三十四）に、いずれも義浄が訳した、唐の時代ですが、それらに記されています。サンスクリット文献では『デイヴィヤ・アヴァダーナ』に対応する記述があります。

その文献の中で、目連は地獄・餓鬼・天・人などの世界を遊行し、その苦しみを見ているが、いつも目連がいるわ

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）



定金計次説



M. Zin & D. Schlingloff 説

図2 アジャンター第17窟 生死輪圖像配置図

けではないから、寺門の屋下

に「生死輪」を描くのがよい、と釈尊は阿難に告げ、その描き方を述べています。「生死輪」は衆生の苦しみ、そしてそれがどうして起こるのか、それを脱するにはどうしたらいいか、仏陀の教えをきちんと守りなさいということを描くように、

と釈尊の言葉として律とアヴァダーナ文献に述べられています。

このアジャンターの生死輪の壁画を本格的に研究したのは、シュリングロフというドイツのアジャンター壁画研究の有名な先生ですが、その後、お弟子のモニカ・ジンという優秀な女性の研究者と、シュリングロフの二人の共著の論文が発表されました。その共著の論文で、下の方は全く剥落してはいますが、地獄が描いてあって、その上に餓鬼・畜生・人間・阿修羅・天の六趣（六道）が描かれていたという説を出しました（図2）。

これに対して、京都市立芸術大学の定金計次氏が反論を書きまして、下の方に地獄・餓鬼・畜生、このあたりが欠損しているのですが、一番上が天であるというのは、モニカ・ジン／シュリングロフの説と同じですけれども、他の上部の四つの区画には、仏教の須弥山世界観に説かれる、須弥山の東西南北にある四つの大陸、洲に住んでいる人々の様子を描いているのだという説を出しました。われわれは南の瞻部洲、閻浮提とも言いますが、この南の洲に住んでいる。北の方の反対側は、非常に涼しくていい所で北俱

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

盧洲、それから東の方は勝身洲、西の方は牛貨洲です。定金説は天界の他に、人間界を四区画に分けて、その下方に畜生・餓鬼・地獄の五趣を計八区画で表していたとするものです。これらの円輪の周り、外輪には、十二因縁という仏教の教義を絵で表していますが、断片的にしか残っていません。

アジャンターの生死輪の解釈は、モニカ・ジン／シュリングロフの六区画に六趣（六道）を描いていたという説と、定金氏の八区画に五趣（五道）を描いていたという二つの見解があるのですが、大きな違いは「地獄・餓鬼・畜生・人・天」の五趣か、あるいは五趣に阿修羅（修羅）を加えた六道かという点です。小乗（部派仏教）の多くは五趣説で、特に説一切有部という部派では五趣説をとり、大乘では六趣、われわれは六道輪廻と言いつつ、東アジアでは六道が一般的となります。

モニカ・ジン／シュリングロフ説と定金説では、私は定金説の方が説得力があると思います。その理由は一つには図像自体の解釈ですが、それは細かい話になるので省略しますけれども、もう一つの理由は五趣説をとるか、六趣説

をとるかで、五趣説の方が妥当だと考えます。と言いますが、アジャンターの壁画には、たくさんの仏教説話図が描かれているのですが、シュリングロフが明らかにしたように、それらは説一切有部の伝承に基づく説話が多く見られます。説一切有部は六道説ではなく、五趣説をとっていますので、そういうところからいっても、阿修羅が表されていない五趣生死輪図であったと思います。

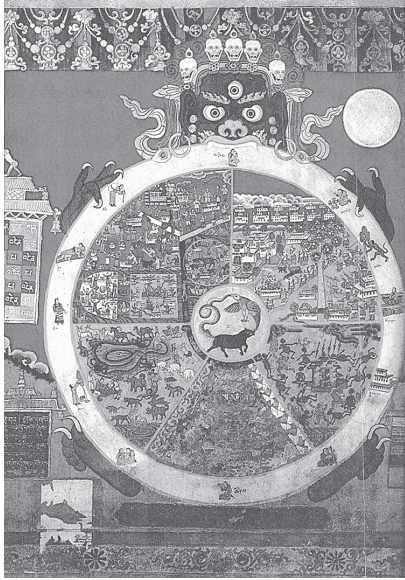
二、チベットの生死輪

さて、チベットにはたくさんの生死輪の作例があります。図柄がよく残っていますので、それをご説明したいと思います。チベットにおいては、お寺の入り口に五趣生死輪、あるいは六趣生死輪の場合も多いですが、たくさん生死輪が描かれました。

〔図3〕はティクセ寺というお寺に描かれているものですが、その中心円に「貪・瞋・癡」の三毒を象徴的に表しています。貪（むさぼり）はハト、瞋（怒り）はへびで表し、癡（無知）はイノシシで表します。それら三つが互いに食いあう形で、貪はハトか、鶏で表す場合もあり、癡は

イノシシか、豚で表すこともあります。

ハトとかニワトリが、どうして「貪（むさぼり）」を意味するのか、それは經典には書いてないですけども、ハトやニワトリはしょっちゅうついばんで食べています。ハトという平和の象徴のようにわれわれは思いますけれども、仏教ではむさぼりの象徴になります。それからヘビは怒りの象徴になる。イノシシやブタというのは無知、愚痴、そういうものを表していて、この三毒が、われわれ生



生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

図3 チベットの五趣生死輪 テイクセ寺

きているものにはどうしてもあるんですね。それによって苦しみの世界が生まれると教えているわけです。

第二の大きい円の方の区画には、地獄・餓鬼・畜生、上方の区画には人間と天の世界を描いている。そしてその回りに十二支縁起を描くのですが、無常大鬼と呼ばれる死を象徴する鬼が輪をかじっています。この苦しみの輪を抜け出すには、お釈迦様の教えをよく守ることが大事で、そうしてこの輪廻の輪から脱することができれば、上方の白い円で表されるのですが、涅槃円浄と言われる悟りの世界に達することができることを示しています。

輪の中の一番大きい部分に五道のあり様を描いており、一番下が地獄の世界で炎が燃え立って、怒りの明王が表され、地獄で苦しんでいる人たちが大勢表されます。それから「地獄・餓鬼・畜生」の三悪道と言いますが、次が向かって右の餓鬼の世界で、いつも飢えて食べようとすると、口から火が出て食べることができない、飢えの苦しみの世界。

地獄の向かって左には、畜生の世界、つまり動物界で、人間に殺されたり、動物が食い合ったりする畜生道が描い

である。そして輪の上半分には天界と人間界を表しており、右半分に天の世界、左半分に人間世界。人間世界は、先ほど申し上げた須弥山世界の四つの大陸、われわれの住む閻浮提、すなわち南の瞻部洲、それ以外に北の俱盧洲、東の勝身洲、西の牛貨洲という大陸が描いてあって、そこに人間世界の人々のあり様を表しています。

天の世界は一つの区画ですが、よく見ると神々と阿修羅たちが戦っています。六道では、天と阿修羅の世界を分けるようになりますが、五道では天と阿修羅と一緒に描きます。というのも、もともと阿修羅も神であって、天の神々と同じ仲間だったので、ここでは一区画で天界を表していて、五趣になるわけです。

円輪の外周に当たるところに、十二支縁起が描いてあります。時間の関係で説明は省略しますが、配付資料の別紙に書いてありますのでご覧ください。十二支縁起、あるいは十二因縁は仏教の教えの基本となっている教義で、どうして人間の苦しみや、生きたり死んだりする輪廻が起るのかということ、系列を追って述べたもので、無明から起こって、行、識、名色、六処、等々と続き、最後に老死

という苦に至ることを説いたものです。それを絵で示しています。

チベットでは、五趣ではなく、六道（六趣）輪廻図も多くあります。同様に、無常大鬼が生死輪をくわえ、中心に三毒が描かれ、六つの世界、六道が描かれています。

チベットでは、非常に多くの生死輪の作例が知られており、寺院の入り口に壁画で描かれる以外に、軸装のタンカに描かれたり、近世では木版画でも制作されました。ネパールでは売店で売っているものも随分あります。図像には五道と六道があり、細部にもヴァリエーションがありますが、基本的にはインドの伝統を継承しています。

六道輪廻図の代表的な例を見てみましょう（図4）。円輪の中心には、三毒の「ニワトリ・ヘビ・イノシシ」が描かれ、その外周には良い行いをした人、善業を積んだ人たちは天に昇っていき、悪いことをした人、悪業を重ねた人たちは、悪鬼によって地獄に引きずり落とされます。

円輪の一番下は地獄で、釜ゆでになったり、舌を抜かれたり、釘付けにされたり、刀剣の木の茂る山に追い立てられたり、猛火で焼かれたり、いろいろな苦しみの世界が描

かれます。そして向かって右が餓鬼の世界で、飢えて痩せこけ、お腹だけ大きい裸の餓鬼たち、左には畜生道が描かれ、動物たちが食い合っています。よく見ると、いままでなかった仏陀が六道それぞれに表されています。チベットでは、どの六道のところにも、最終的には仏陀が救つてくれますよということで六道の救済を象徴しています。仏陀の代わりに観音菩薩が表される場合もあります。



図4 チベットの六趣生死輪

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

一番上は天の世界、天道で、宮殿の中に神々の王である帝釈天が表されています。そして、ここでは区画を設けていて、向かって左には、天の神々を目がけて戦いを挑んでいる阿修羅たちの世界である修羅道、向かって右に人間の世界、人道を描いています。

このように円輪の中に六道の世界を表した六道輪廻図です。円輪の外、画面の右上隅には仏陀が白い円輪、涅槃を象徴する白円壇を指さし、人々に仏陀の教えを守って、苦しみの輪廻の輪から脱するように示しています。また、仏陀の反対側、画面の左隅には観音菩薩を表し、最後には観音様が救ってくれることを表しています。

三、新疆クチャのクムトラ石窟

この生死輪、六道輪廻図が中国に伝わります。中国の例は、実はあまり多くはないのですが、興味深い例がいくつかあります。現在知られる、おそらく最も古い作例の一つは、敦煌莫高窟から東へ約百キロメートルの地にある安西榆林窟の壁画です。榆林窟は唐代から清朝まで造営されていますが、唐・五代・北宋の貴重な壁画が残っています。

その第17窟の前室甬道に「生死輪」と「目連の地獄巡り」が対面して描かれていて注目されます。曹氏帰義軍時代（九一四〜一〇二八年）のものと思われる、重要な作ですが、今回は時間の関係もあり割愛します。

さて、中国新疆ウイグル自治区のクチャという西域北道の中心地があり、かつて仏教が大変栄えたオアシス国家でした。クチャには有名なキジル石窟の他に多くの仏教石窟があります。その一つのクムトラ石窟の第75窟の壁画に生死輪が描かれています。ウイグル時代のものと思われますが、制作された時期ははっきりわかっていません。

この地は現在、中国新疆ウイグル自治区と呼ばれますが、ウイグル族というのは、もともとモンゴル高原の方に住んでいたトルコ系の民族で、はじめマニ教を信仰していたのですが、やがてモンゴル高原から追いやられて、その一派が新疆のタリム盆地に移住し、そこで仏教に改宗します。

ウイグル仏教に関する研究は、最近随分と進んでいます。ウイグル語の解読で歴史や仏教の様子がわかってきました。ウイグル時代にはトルファン地方を中心にマニ教

絵画や多くの仏教壁画が制作され、残っています。

ウイグル人たちは、九世紀の後半から十二、十三世紀くらいまで、非常に大きな勢力を持ちます。クチャのクムトラ石窟第75窟は、小さい窟ですが、石窟を入った奥の正壁に足を組んで瞑想する禅定僧が大きく描かれていて、欠けてはつきりとはわからないのですが、両手の上に鉢が置かれ、そこから墨線が引かれていて、両側に三場面ずつ六道が表されています。ですから、瞑想する僧の周りに六道を描いているのです。

剥落が多いですが、森美智代氏が線図をつくられているので、それで見ますと、図像が見分けられます（図5）。向かって左上に一番目の神々が並ぶ天道、右上には須弥山が表されていて、中国では須弥山世界の中央に阿修羅を表すことが多いので、これはどうも二番目の修羅道を表している。

次に向かって右の中段に、三番目の人道で、興味深いことに人間の姿として、服装からわかるのですが、ウイグル人が描かれています。このことから、この壁画がウイグル時代に描かれたものであることがわかります。

そして、向かって左の中段に四番目の地獄道の釜ゆでの場面、それからその下に馬などが見られる五番目の畜生道、右下に六番目の餓鬼道です。

このように禅定僧の両側に三場面ずつ六道が描かれていて、僧が瞑想することによって、六道を克服する、自分が六道から脱しようとするのか、あるいは六道、特に悪趣に落ちた衆生を救済しようとするのか、二つの解釈が成り立



図5 クムトラ第75窟正壁壁画
森美智代氏作図

生死輪 (六道輪廻図) から観心十界図へ (宮治)

ちます。後者の解釈は「慈心」を起こす瞑想実践を表したのではないかという見方で、壁面に記された墨書銘(損傷が多い)からその可能性が高いと考えられます。

中国の研究者で中央の禅定僧は地藏菩薩ではないかと言っている人もいます。確かに、地藏菩薩が六道を救済する姿が敦煌の絵画に出てきますが、この壁画ではお地藏さんではなくて、瞑想する禅定僧と見られます。この壁画は十〜十一世紀の制作と考えられています。

さらに、興味深いことに、この窟の向かって左の側壁には、樹下で瞑想する僧、つまり禅定僧たちの列が描かれていて、その中に、禅定僧の前に、二つの小さい生死輪が見られるのです。インド・チベットではやった生死輪が非常に小さく表され、それを僧たちが瞑想する、そういう図が描かれているのです。

クムトラ石窟は、クチャのまちの郊外にあります。クチャ地方では禅観、つまり僧たちの瞑想・観想の実践が大変はやった地域として有名で、キジル壁画にも禅観僧を表した壁画が少なくありません。この地でサンスクリット語の禅観に関する教本も見つかっていますし、禅観経典が、

この地出身である鳩摩羅什によっても多く漢訳されています。こういうことから、この地域では瞑想実践、観想、禅観がはやったことは疑いなく、ウイグル時代にもその伝統が受け継がれたことは充分に考えられます。

四、中国への傳播と変容

いまウイグル民族のことをお話ししましたけれども、中国の歴史というのは漢民族と、北方の遊牧民が南の中原へと侵攻し、シルクロードの交易によって経済力もつけて強大となる、その戦いと交流の歴史であると言ってもいいくらいです。百年、二百年単位で大きく歴史が変わっていきます。

唐が亡びて五代十国と呼ばれる時代、そして十世紀中頃から北宋が大きな力を持つてきますが、その前後から十二世紀にかけて、北方では契丹（遼）、西夏、ウイグル、そうした民族がみな独立して強力になっていきます。最終的に北宋は金に滅ぼされて、南に移って南宋時代になります。日本の平安時代の後期に当たるこの時代は、東アジアの激動の時代です。

こういう戦乱の多い時代ですけれども、それぞれの国では、シルクロードの交易によって経済的に繁栄すると同時に、王や貴族たちは仏教を篤く信仰しているのです。宋の時代にも仏教が復興し、吐蕃、チベットももちろんです。契丹民族が遼を建国した時に漢文の大藏経を刊行し、ウイグルも仏教に改宗したり、西夏は西夏文字の大藏経をつくっています。

このころの時代の状況というのは、なかなか複雑でわかりにくいのですが、仏教がそれぞれに大変栄えていたことが最近の研究で、かなりわかってきています。

日本では、平安末から鎌倉時代に、南宋との行き来が頻繁に行われ、重源、栄西、俊芿、道元といった僧たちが入宋し、いわゆる鎌倉仏教、現在まで続く仏教の宗派の元になった多くが宋代仏教の影響を受けています。特に禅宗は宋代仏教を直接的に受け入れ、その後の日本仏教に大きな影響を与えたことはご承知のとおりです。復興した中国の天台宗をもとに浄土教も影響を受けたと考えられます。律宗は、日本では独立した大きな宗派にはなりませんでしたが、この時代に大きな役割を果たしました。

話が脇道にそれましたが、美術の話に戻ります。四川省に大足石窟という大規模な石窟遺跡があります。北山、宝頂山、南山、石篆山、石門山などの、石窟というよりは石刻と言った方が正確ですが、岩山を彫り込んでたくさんの仏像や仏教説話がほとんど丸彫りで彫刻されています。

石窟という点、インドでは信仰の対象であるストウパー（仏塔）を彫り込んだチャイティヤ窟と、僧たちが住む僧院（ヴァイハラ）窟、その二つを組み合わせて石窟寺院と普通は言うのですけれども、中国に入りますと、インドの石窟の形態とは変わります。特に四川省では、岩をほとんど丸彫りか高浮き彫りで立体的に、いろいろなテーマをたくさんの彫刻で彫り出しています。

中国では唐の時代にも多くのお寺が、長安の都をはじめ、各地でつくられたことが文献には記されていますが、それらはほとんど残っていません。それに対し、石窟寺院は、敦煌、雲岡、龍門と多く残っています。

それとともに、四川省、蜀の地は、山が非常に多く敵が攻めにくいので、中原で戦いに敗れた人たちは、四川省に逃れます。玄宗皇帝も安祿山の戦いで敗れて蜀の地に逃げ

たのですね。そういうこともあって四川省には、仏教の遺跡が多く残っています。特に唐代以降、南宋時代のもものがたくさんあります。

五、四川省大足宝頂山の石刻

さて、生死輪のお話ですけれども、大足宝頂山大仏湾という石刻に見られます。山上の聖壽寺にある遺跡で、馬蹄形に湾曲する全長約二八〇メートル、高さ十五メートルの岩壁に、多くの主題が彫り込まれています。ここには銘文がありまして、この宝頂山大仏湾の石刻は、趙智鳳という人が、南宋時代の後半（一一七九〜一二四九年）に、七十年をかけて造営したことがわかっています。

大仏湾の入り口の近くに生死輪、それから華嚴三聖像、千手観音、大涅槃像、父母恩重経変、観無量寿経変、地獄変、こういった尊像やテーマがものすごい規模で、立体絵巻のように表されています。

入り口を入った最初のところに生死輪が刻まれています（図6ab）。インド・チベットでも寺院の入り口に描かれ、その図像もやはり無常大鬼が生死輪をかじって、両手



図6a 四川省大足宝頂山大仏湾 生死輪

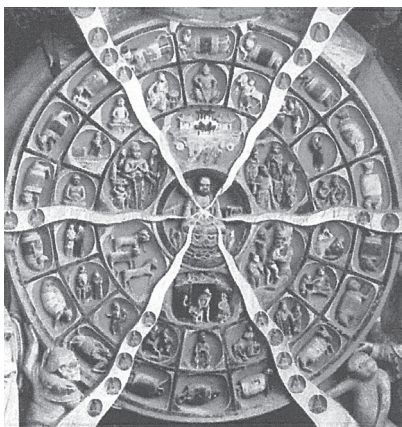


図6b 同部分

のが出ています。これも先ほどのクムトラ石窟の図像とおそらく関係し、瞑想によってこの輪廻の輪から脱することができるといいうことを、これで見ているのです。

生死輪はいま述べた中心円と、その周りの三重の円輪から成つて

と両手で円輪を抱えています。ここでは立った姿で表されています。

インド・チベットの構成とだいたい同じですが、一番違うのは、先ほどクムトラ石窟でも見ましたが、中心に禪定僧の姿があることです。よく見るとその両側にニワトリかハトと、イノシシが表され、ヘビは台座の下の方に巻き付いています。三毒が表されています。しかし、三毒だけではなく僧が瞑想し、しかも胸から光の帯のようなも

います。第二の円輪には上から右回りに、天・人・餓鬼・地獄・畜生・阿修羅の六道を表している。一番上は天です。天道を描くときは、だいたい宮殿を表します。向かって左の修羅道は阿修羅の像と従者で表しています。興福寺の阿修羅は六臂ですが、ここでは八臂で、上に掲げた両手で日月を持つのが阿修羅の特徴で、これで修羅道を表します。

それから、向かって右が人間たちを描いた人道で、当時

の人たちの服装が見られます。それから右下に餓鬼道、左下に畜生道で、一番下が地獄で地獄の釜があります。ですから、ここでは六道輪廻を表していることがわかります。

その次の第三の円輪には、十二縁起が表されていますが、数えてみますと区画が十八あります。十二縁起は十二因縁、あるいは十二支縁起とも言いますが、仏教の基本の教えです。どうして苦しみは起こるのか、それを克服、断つにはどうすればよいのか、その因果の道理を明かしたものです。無明から起こって、それから行、識、名色、六処、触、受、取、有、生、老死の十二です。根源的な無知から認識作用が起こり、欲望が生じ、それが生死の苦しみを生むという仏教の教義です。

それを図像によつて表しています。チベットの図像では無明を「盲人の女性」、行を「つぼ作り」、識を「果物を取る猿」等々で表します。

『根本説一切有部毘奈耶』には五趣輪廻図の描き方、図像についても述べられているのですが、ここでは十八項目に分けています。というのは、一番目から十一番目までは同じですが、「老死」の十二番目を「老・病・死・憂・

悲・苦・悩」と七つに分けて、全部で十八にしています。宝頂山の生死輪の第三の円輪には十八の図像があり、律文献の『根本説一切有部毘奈耶』に出ている内容に、だいたい合っているようです。

もう一つ面白いのは一番外側の第四の円輪に見られる灌漑輪、つまり水車です。インドのアジャンター壁画には見られず、チベットにもあまり見られないのですが、最近、インド側のチベット文化圏である、スピティのタボ寺に、かなり剥落した生死輪の外輪に灌漑輪が回っている様子を描いた例が報告されています。水車のように円輪が描かれ、缶とか壺があつて、衆生が生死を繰り返す、その様子を示すために、缶や壺から人間の頭が出ていて、後ろは動物のしつぽや脚が表されていたり、あるいは動物の頭と人間の足になっていたり、いろいろな生まれ変わる様子を、これでもって象徴的に表します。

灌漑輪の缶から人間や動物の頭や足を出す図像については先ほどの律文献にも書いてあり、チベットでも一部描かれていたようですが、中国で一般的になったようで、安西榆林窟第19窟にも見られます。

宝頂山大仏湾の話に戻りますが、面白いのは生死輪の中心に僧が瞑想していることで、このことは律文献には述べられていません。この禪定僧の胸から六本の白い帯が、外に向かって伸びて円輪の外まで出ているのです。つまり、僧の瞑想によつて輪廻の輪から外に出ることができる、解脱、悟りに向かつていくことを示しています。

その帯は光を表すような白い帯で、それらには小さな円がいくつも描いてあつて、その中には坐仏が上の方に表され、下の方では坐菩薩が表されています。つまり、深い瞑想によつて菩薩や仏になって、輪廻の輪から脱することのできるのだということを象徴しているのだと思います。おそらく華嚴経の「十地品」と関係する表現と私は考えています。

僧の胸から六本の白い帯が外に出ることは、禪定によつて六道輪廻の苦しみの世界を脱し、菩薩・仏の世界に到達できるということを表したものでしょう。この生死輪は禪定僧の胸、つまり心が輪廻転生の源であり、かつ悟り、涅槃の源であるということを示唆しています。これはインド・チベットの生死輪の伝統と大きく変わり、中国での発

展を示すものと言えます。

中国で北宋の時代に、このような図像がつくられたと思いますが、残念ながらいまはほとんど残っていません。

六、韓国海印寺の高麗經

興味深いことに、韓国の海印寺にもこの生死輪が伝わっています。海印寺は、新羅華嚴の初祖である義湘の法系にある順応と利貞によつて、八〇二年に創建された、大変いわれのあるお寺ですが、新羅の末から高麗の初期にかけて、華嚴宗の中心的存在となります。

韓国の仏教は、華嚴宗と禪宗、そしてその両者が融合した曹溪宗がいまでも中心的な宗派になっています。海印寺は世界最古の大蔵経を有することでも有名です。高麗時代には二度、中国から請来した大蔵経を基に開雕しました。一度目は、一〇一〇年に顕宗が契丹軍の撃退を祈願して着手し、四十年後に完成しました。しかし、その初雕版はモンゴル軍によつて焼かれてしまったため、高宗が敵軍の退散を願つて、一二五一年に再雕版を完成させました。その再雕版が「高麗大蔵経」といわれ、その版木が海印寺に伝

わっています。

実は、われわれ研究者が使う「大正新脩大藏經」の基になったのはこの海印寺に伝わった「高麗大藏經」で、それを底本にしています。海印寺には大藏經以外にも經典が多くあります。その中に「華嚴經變相版（周本）」といわれ



生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

図7 海印寺 版本「大方広仏華嚴經卷第三十七變相」部分

る版本四十二枚が伝わっているのですが、その中に生死輪の図がありません。

「華嚴經變相版」の中に生死輪の図があることは、私は林雅彦氏の『絵解きの東漸』という本で知ったのですが、張忠植『高麗華嚴版画の斗世界』にその全体の写真が掲載されています。そこに、非常に貴重な生死輪図があります（図7）。華嚴經の第三十七卷の変相の部分ですが、「十地品」の「第六現前地」を表すもので、右側に毘盧遮那仏が描かれ、そのまわりに解脱月菩薩と金剛藏菩薩、その他多くの菩薩がいて、左側に生死輪が描かれています。生死輪の図が華嚴經の「十地品 第六現前地」を講説する図像として表されているのです。

生死輪の図像は宝頂山石刻のものに似ており、無常大鬼が円輪をかじっていて、両手で抱え、両足が下に見えますので立っています。円輪の中心円が興味深いのですが、いまままで見てきた三毒を表すトリ・ヘビ・イノシシの他に、その上に蓮華座に坐す仏陀もいるのです。ここには仏陀と三毒が表されています。もっともこれは仏陀というより、十地の階梯を上った菩薩というべきで、その両側に「第十

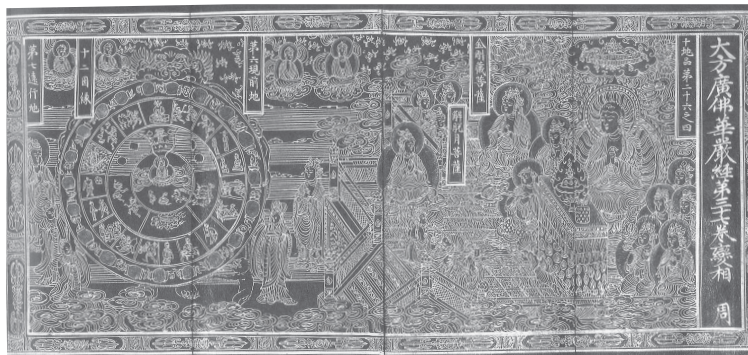


図8 紺紙金泥高麗經「大方広仏華嚴經第三十七卷變相」見返絵 湖林博物館

法雲地」を示唆する雲の表現があります。

その次の円輪には上に天界、その左右に人間世界、ここでは丸とか四角とか半円が出てきますので、これは須弥山世界の四方の大陸（四洲）で人間界を表しており、下方には畜生と餓鬼、下が地獄です。ここでは阿修羅が見当たらないので、五趣を描いています。

三番目の円輪に

十八区画を設け、宝頂山の図像のように「十二縁生生滅の相」を表す。一番最後の円輪には水車が回り、壺から有情が頭と足やしっぽを出しています。また、生死輪の下に、人物やサルが輪をまわす仕草をしており、宝頂山でも見られました。絶え間なく煩惱を引き起こすことを示しています。中国から図像が伝わってきたのに違いありません。

この海印寺の版本は生死輪が『華嚴経』「十地品 第六現前地」に出てくる「三界は虚妄にしてただ一心の作なり」「十二因縁分はみな心に依る」という、有名な「三界唯心」の教義を表したものとされます。「三界唯心」とは、三界（欲界・色界・無色界）の現象はすべて心から現れ出した影像で、十二縁起によって生成する輪廻も心によって存在するという考えです。十地品の第六現前地において、菩薩は般若の智慧を得、さらに第七地から第十地に至って般若の智慧は慈悲として衆生の救済に生かされるとされます。生死輪の図像はこうした『華嚴経』の「三界唯心」観に取り入れられたことがわかります。

実は、つい最近版本だけではなく、紺紙金銀泥の高麗版『大方広仏華嚴経』があり、やはりその「第三十七卷変

相」に生死輪が描かれていることを、奈良の大和文華館学芸部の瀧朝子さんに教えていただきました。韓国の国立中央博物館の出版物にそれが出ていて、湖林博物館に所蔵されているということですが、版本と非常によく似ていて、版本の基になったものと思います(図8)。このように『華嚴経』の「十地品」の中の見返し絵として生死輪が描かれたことがわかります。

七、生死輪の日本への伝来

以上、生死輪を、インド・チベット、そして中央アジア、中国、韓国と見てきました。果たして日本にこの生死輪というものが伝わっていたのかどうか、このことを考えてみたいと思います。

調べてみますと、文献の上では、平安時代の後期には日本にも生死輪が入っていたようです。大江親通、この方は、平安時代後期に、二回、奈良のお寺を訪れ、いろいろ記録を付けていて、『七大寺日記』(一一〇六年)、そして、もう一つ『七大寺巡礼私記』(一一三七年)という文献が残っています。この二つの記録は、当時の南都の諸寺

の様子がわかる美術史や建築史にとって重要な文献なのですが、その中で興福院というお寺に生死輪と見られる記述が出ています。

その興福院の中門の額に「十二因縁之絵様」があることが簡単に記されています。詳しいことは書いていないので、はっきりわからないのですが、「十二因縁之絵様」というと、先ほど見た生死輪の中に描いてある十二縁起、その「絵様」、図像だというふうに考えられます。

もう一つは、鎌倉時代の成立とされる護国寺本の『諸寺縁起集』という文献があり、興福院の条に、やはり額に「十二縁起の図」とあり、「無明鬼形の腹中に多くの種々の人形」と注記されている。この文から見ても、興福院の門に生死輪の図があったことは間違いないと思います。

このように文献上から、生死輪図が十二世紀には、日本に伝えられていたことが推測されます。現在ではそういう古い絵は知られていないのですけれども、梅津次郎先生、絵巻物を研究した大家ですが、この先生は早くに高山寺に生死輪図が伝えられていたのではないかと重要な研究を『美術史』に発表されています。昭和三十年(一九五

五) のことです。それ以後、生死輪図の研究はほとんどさ
れていないのではないかと思うのですが、梅津先生は高山
寺に伝えられたと見られる「生死輪図巻」の転写本（一〇
五〇〜五一年頃）がかつてあって、それを江戸時代の天保
十年（一八三九）に、桑原柳庵という人によって忠実な摸
写本が作られ、それが現存することを明らかにされました。
それを以下にご紹介しながら、私見を加えてお話しし
ます。

この転写本は生死輪図の図様を卷子本にしたもので、ば
らばらになったものを繋いでいて、順番や上下などがまち
まちです。現状の巻首の方から見っていくと、図様は墨線で
地獄の釜、餓鬼の部分、そして大きく僧形坐像の頭頂や両
足が描かれ、その周囲に図様と文字で、阿修羅、人、天、
声聞、縁覚、仏などが表されています（図9a）。

ここで初めて、「声聞・縁覚」などが出てきており、い
ままでは「地獄・餓鬼・畜生・人・修羅・天」という六道
だったのですが、六道プラス四、四聖と言いますが、声
聞・縁覚・菩薩・仏の四つが加わって十界と言われるもの
に変化しています。声聞というのは比丘で、縁覚は辟支仏

とか独覚と言ったりしますが、お師匠さんがなくて自分で
悟りを開いたという仏陀で、人々には法を説かなかつた、
悟りを開いた人です。さらに、菩薩・仏と人々を救いに導
く大乘の位の高い存在が加わります。

この四つの聖なる人ということで、四聖と言いますが、
これまで見てきた六道「地獄・餓鬼・畜生・修羅・天・人
（凡夫）」の上に四聖「声聞・縁覚・菩薩・仏」を加え
て十界と言うようになります。この考えは『法華経』『法
師功德品』にその萌芽が見られ、天台教学において体系化
されたものといわれます。

本来、生死輪は五道か六道ですから、声聞・縁覚・菩
薩・仏は入りません。ところが、この図巻には菩薩が欠損
しているようではつきりしませんが、声聞・縁覚・菩薩・
仏が結跏趺坐した僧形人物の周囲に描かれたようです。

この図巻が生死輪を意図したものであることは、六道だ
けでなく、その次に円輪をかみつく無常大鬼が描いてある
ことから明らかです（図9b）。無常大鬼はいままで見てき
た生死輪、六道輪廻図に必ず表されていた図像ですから、
ここでも生死輪の伝統を継承したものに違いありません。

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

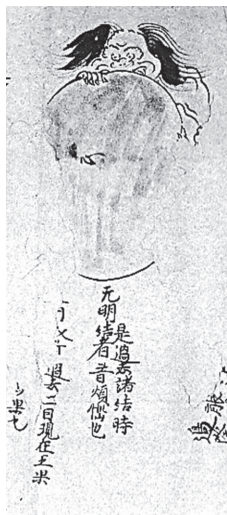


図9b 同部分



図9a 生死輪図巻模写本部分

伝統的な生死輪の中心にはトリ、ヘビ、イノシシの三毒が表されましたが、ここではそれらが見られず、四川省宝頂山の石刻のように、生死輪の中心に僧が瞑想している姿を描いたのではないかと。そしてその下方には六道、上の方には声聞、縁覚、それから菩薩、仏、それらを表していたと思われる。

続いて図巻には、十二支縁起の図が文字と共に表されています。十二支縁起の中で、初めの方は欠損があります。が、名色・六入・触・受・愛・取・有・生・老・病・老死・憂・悲・苦・悩の図様と文字でもって十二縁起を表しています。ここでも、12ではなく、宝頂山石刻と同様、18で表しており、図様も中国やチベットのものと同様のものがあります。例えば「生」では、生まれる出産の場面を表しています。十二支の最後の「老死」を「老・病・死・憂・悲・苦・悩」と詳しくして六つ増えるわけです。最後の「悩」では、馬を曳く図像です。『説一切有部毘奈耶』では駱駝と記されていて、それが馬に代わっていますが、いずれにしてもこれは明らかに十二支縁起を描いているので、生死輪図が基になっていることは確かです。

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

この図巻の奥書には建□二（もしくは三）年二月二十三日実勝が書写を終えたと記されています。梅津先生は、実勝という人は高山寺の明恵上人が亡くなった後、四座講式を継いだ僧で、康元二年（一二五七）に五十四歳で補陀落渡海、すなわち観音様の浄土に船に乗って一週間ぐらいの食料を積んで目指し、亡くなった人と考察されており、「生死輪図巻」の原本は、建長二年もしくは三年（一二五〇）のものとして推定されています。

この図巻は、インド・チベットの生死輪とは異なり、六道の他に、声聞・縁覚・菩薩・仏を入れた十界図となっていたと考えられます。四川省大足宝頂山や高麗経に見られた生死輪は、中心に僧や仏を表していましたが、十界図とはなっていないませんでした。日本の鎌倉時代に入ってきた生死輪が十界図の中に組み込まれたものとする、大きな変化が興ったことがわかります。この十界図は、中国や日本でさらに観心十法界図（観心十界図）となつて発展します。その間の事情はまだよくわかっていませんが、ごく最近注目すべき研究が発表されました。それで観心十法界図についてお話しします。

八、ウイグルと西夏の観心十法界図

観心十法界図は生死輪とよく似た構図や図像をとっています。しかし、観心十法界図は、中心に「心」という字を書き、周囲に六道に加えて、声聞・縁覚・菩薩・仏の全部で十界を描く点で、非常に大きく異なり、輪を抱える無常大鬼も観心十法界図にはありません。

観心十法界図は、単に観心十界図と言われたり、古くは「円頓観心法界図」というのが正式な名称だったようですが、後には観心十界図とか、十界心図、あるいは十界曼荼羅などと呼ばれるようになります。

特に日本に入ってくるといういろいろな呼び方をして、その実態がわからなくなつてしまつたのではないかと思えます。インド・チベット伝来の生死輪が「禪定僧の六道観想図」へと変化したことは、先ほどクムトラ石窟や大足宝頂山の作例で見ました。それらでは生死輪の中心で、僧が瞑想しているものへと変化、発展する。そして、おそらくさらにそれが禪定僧に代えて「心」とし、六道に加えて四聖を入れて成立したのだと推測されます。

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

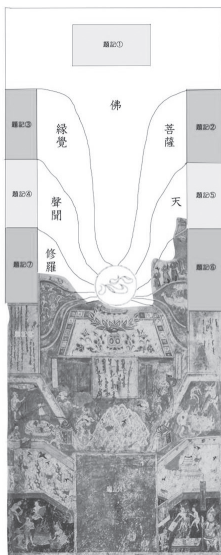


図10b 同
橘堂晃一氏による復元図

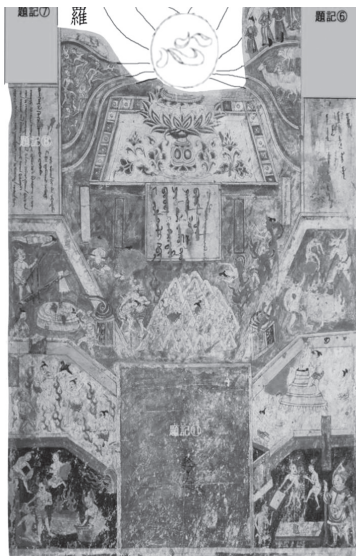


図10a ベゼクリク石窟第18窟将来
ベルリン国立アジア美術館

観心十界図は、おそらく北宋時代に中国で成立したと見られますが、いまのところ現存作例はありません。しかし、最近、トルファンのベゼクリク石窟壁画、および西夏の木版画に観心十界図があることが明らかにされました。つい最近ですが、私の主催する研究会で、龍谷大学のウイグル仏教の研究者の橘堂晃一氏と、東京外国語大学の西夏語の専門家の荒川慎太郎氏にお話をしてもらったのですが、驚くべき研究成果が発表されました。

いまだで六道図、あるいは地獄図といわれていた、新疆ウイグル自治区トルファンのベゼクリク石窟第18窟の壁画がありまして、ドイツ隊のグリエンヴェーデルによって将来され、現在はベルリンの国立アジア美術館に所蔵されていますが、当初の壁画の下半部しか残っていなかったこともあり、全体の内容がよくわからなかった。それが、橘堂・荒川両氏の研究で観心十界図を描いたものであることが明らかとなりました（図10 a b）。

この壁画は上の方の左右に六道を表す波線の区画に人間、畜生、餓鬼などが表され、下方には針の山で逃げ迷う者、体を鋸で切られる者、炎で焼かれる者、舌を抜かれる

者、釜ゆでにされる者など、地獄の描写が七区画にわたって表されており、六道絵ではないかと見られていました。

中央上方蓮台があり、蓮台の上は欠けていて、当初地藏菩薩が表されていたのではないかと考えられていました。しかし、新たな研究によれば、そうではなくて、画面中央の蓮台の上には「心」という字が書いてあったというのです。その一つの証拠は、絵の中にウイグル文字が書かれています、橘堂氏によって「仏心、心仏に私は礼拝します」と解説されたことです。この観心十界図がウイグル時代のものであることも明らかになりました。

しかもこのことが、よりはっきりしたのは、西夏文で記されたこれとほとんど同じ構図の版本が発見され、荒川氏によって解説されたことによります。

西夏文の版本観心十界図は、西夏時代の都城址であるカラ・ホトから出土したもので、ロシアの帝政末期にコズロフ探検隊によって発見され、現在、エルミタージュ美術館に所蔵されています。ロシア人の研究もあるようですが、西夏文の研究はほとんどやられていない状況です。

紙に刷られた木版画のこの観心十界図は、中央上部の方

形区画に絵があり、その周囲に西夏文字による西夏文が書かれています（図11a b）。絵の中心に西夏文字で「心」字が円内に表され、そこから放射状に波線が発出して、十区画に分かっています。それらの区画内に、上から右左、左右、右左と順次下っていく形で、「心」の周囲を「仏・菩薩・縁覚・声聞・天・人・修羅・餓鬼・畜生・地獄」の図像が取り巻いています。

一番下が地獄界で、釜ゆでにされたり、首枷をつけられたり、閻魔王の裁きを受けていたりしています。それから畜生界、動物世界。次に餓鬼界、痩せ細った人が口から火を出す、焰口餓鬼が描かれる。それから男女二人で表された人間界、続いて一面四臂の阿修羅を描く修羅界、さらに天界、そして四聖が表される。声聞は僧の姿で表す。次の縁覚も僧の姿で、縁覚と声聞をどう描き分けたのか、判定が難しいのですが、ここでは縁覚は鉢と錫杖を持っています。それから菩薩は水月観音で表され、最後に中央上部に仏陀が蓮華座に坐している。

「心」という字からこのように放射状に十界の図像が表され、さらにその周囲に、それぞれの図像、絵と対応する

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

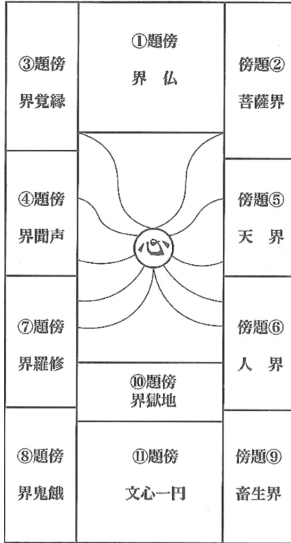


図11b 同 配置図
(荒川慎太郎・橘堂晃一氏による)

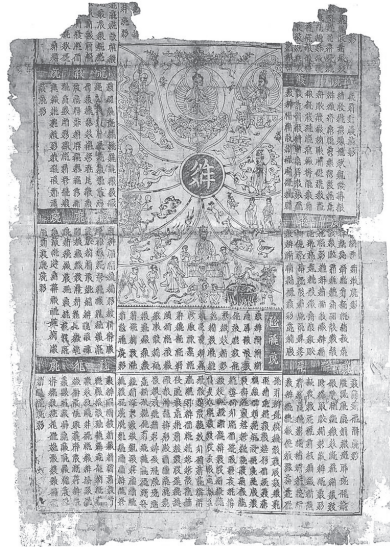


図11a 西夏文による「観心十界図」
エルミタージュ美術館

形で西夏文の詳しい傍題があり、それぞれの内容が記されているということですが、それで、これが観心十界図を表したものであることが明確になったわけです。

このようにして六道・三声聞・縁覺・菩薩・仏の四聖、全部で十界の図像があつて、真ん中の「心」字から発している、これが観心十法界図、あるいは観心十界図といわれるものです。

以上は橘堂・荒川両氏による最新の研究の成果の概要ですが、詳しくは参考文献に挙げました、両氏による『観心十法界図』をめぐる新研究―西夏とウイグルの事例を中心に―というタイトルの『國華』に掲載された論文を参照ください。

九、北宋時代の観心十法界図の成立

さて、この観心十法界図は、正式には「円頓観心十法界図」と言いますが、北宋時代の慈雲遵式（九六四〜一〇三二年）という、天台宗の第十六祖宝雲義通に師事して、四明知礼とともに天台宗の再興に尽力した僧が、この遵式が創始したことが文献上知られています。『西湖志

纂』によれば、天禧四年（一〇二〇）に時の丞相王欽若が病の時に、夢で遵式に会って病が平癒し、その奇瑞に因んで「十法界観心図註」を著したという。そして、王欽若は遵式から贈られた「円頓観心十法界図」に序をつけて印行して広めたとされています。

遵式が創始した「円頓観心十法界図」は『大日本統蔵経』に収録された『天竺別集』の中に見られ、そこに図と王欽若の序、および遵式の解説文と偈文があります。しかし、肥尾尚子氏の詳しい研究によれば、もともと『天竺別集』には王欽若の序はなく、『大日本統蔵経』の元になったのは、『円頓観心十法界図』という版本の書物があり、そこに収められた「円頓観心十法界図形象」であることを明らかにされています。

いずれにしても、「円頓観心十法界図」は、北宋時代、一〇二三年頃に版本として刊行され、それが日本に伝えられたと考えられます。実は志磐撰『仏祖統記』にも「円頓観心十法界図」が採録されており、四庫全書に中国国家図書館蔵宋本（一二六五〜一二七〇年発行）が収められていることが橘堂氏によって指摘されています。現存する最も



図12 「円頓観心十法界図」（『大日本統蔵経』所載）

古い刊本で、中国で流布していたことがわかります（ただ、図は地獄が蓮華となるなど異なる部分がある）。

この「円頓観心十法界図」の図（図12）を見ると、中心に「心」という字があつて、そこから十本の波状の放光線が引かれ、その先にいずれも円の中に、下から左、右、左、右と順次上昇する形で、地獄、畜生、餓鬼、修羅、

人、天とあり、それから縁覚、声聞、菩薩、仏と続いています。それぞれの図像は、いずれも一体ずつで簡明に表されています。

こういう図が『大日本統藏経』に収められているのが、大円の中に「心」を中心にして下方に六道、上に四聖のあわせて十界を、それぞれ円の中に表しています。「心」から放光帯で十界をつないでいるわけです。

「円頓觀心十法界図」の意味するところは、『天竺別集』や『仏祖統紀』に収録された「王欽若序」によってわかります。そこには「諸法実相」「円融三諦」「一念三千」という言葉が引用され、天台大師智顛の思想が見られます。「一念三千」というのは、智顛の『摩訶止観』（巻五上）に説かれていますが、一心の中に十法界があり、その一界一界がまたそれぞれ十法界を備えているので、計百法界となつて、その百法界が、それぞれ三十種の状態を示すので、一心の中には計三千の法の世界が備わっている。つまり、心というのは宇宙のすべての事象を備えている。その心を静かに感じて修行をすべきということを言っています。

法界という言葉はあらゆるものすべての事象を言い、そ

れが心の中に収まる。逆に、心によって世界すべてがつくられていると言ってもいい。遵式によって創始された「観心十法界図」は智顛のこの「一念三千」の考えをもとに、心によって地獄から仏に至る十界がつくられることを図示し、瞑想修行に使えるようにしたものと考えられます。

『大正新脩大藏経』には図像編がありまして、その第十二巻に「十界曼荼羅」と書かれた図があり、いま見てきた「観心十法界図」とよく似たものです。これは東京芸術大学が所蔵しているもので、版本ではなく、紙に描いた淡彩画です。

腮尾氏によれば、玄証が久安四年（一一四八）頃に写したものとされます。中心円には「心」の字がなく蓮台だけで他は黒く塗られています。周囲には十の円内に十界の図像が表され、中心円と放光状の波線で結ばれています。「円頓觀心十法界図」の一種に違いありません。転写本だと思えますけれども、これも高山寺に伝来したものらしい。先ほどご紹介した「生死輪廻図巻」もそうですが、高山寺を拠点に南宋時代に經典・文物が平安時代の後期、十二世紀に伝わっていたと思われれます。今後、北宋・南宋時代

を中心に、その後のアジア仏教史を再構築できれば、アジアの中の日本仏教の様子がわかってくると思います。

十、日本の観心十界図

それで、最後に日本の六道絵と観心十界図の関係をお話しします。もともと六道の苦しみとその原因、それから脱するための仏陀の教えを图示したインド伝来の生死輪は、中国で「心」の修行のための観心十法界図、観心十界図へと変貌し、平安後期に日本に伝えられました。日本では広まりませんでした。もともと中国でもどれくらい広まったかわかりませんが。

日本では、平安後期から鎌倉時代、そしてそれ以降、六道絵が大変に人々の関心呼び、多くの作例があります。ここでは六道といっても一番苦しみの多い地獄、それから餓鬼、身近な人間、これら三世界の苦しみを特に強調して六道絵を描いています。

そしてそれと共に、よく地獄・極楽と言いますけれども、地獄と極楽を対置して、極楽往生が願われるようになります。浄土教の発展と六道思想や六道絵が深く結びつく

ようになるわけです。われわれは地獄・極楽と言っても違和感を抱きませんが、極楽というのは阿弥陀さんの仏の世界です。阿弥陀如来の極楽世界は、輪廻の輪から脱した世界なのです。もともと地獄に対置するのは天です。仏教の考え方では、天も六道の中で、天にも苦しみがある。神に生まれても、天人五衰といって、亡くなる時には頭上の花がしぼんだり、天衣がよごれたり、腋の下から汗が出て臭いにおいがしたり、いろいろ嫌なことがある。天に生まれても、人間よりは少ないけれども、やはり苦しみがあります。ですから、六道は永遠の苦しみの中にある。それを完全に脱した世界が仏陀の世界です。

日本では六道の苦しみが強調され、その最たる存在として地獄の世界がリアルに描写され、その対局として極楽への願いが強まっていきました。地獄・極楽という対概念が人々に深く浸透していったのです。それには源信の『往生要集』の影響が大きかったと思います。

このように、仏の教えをよく守って、自分が修行をして、それによって仏の世界を目指し、輪廻を脱し、悟りに至ると言うのが本来だったのが、いかに現世は苦しいか、

地獄が苦しいか、それを逃れ、救われるために阿弥陀の極楽浄土を願ひ、念仏し、往生を遂げるのがいいという方向に、信仰が移っていった。その背景には歴史的な状況や仏教が庶民層に広く根づいていったことがあると思います。

平安後期に中国から生死輪や観心十界図が入ってきたのですが、その後はどうも見捨てられたというか、ほとんど作例が見られません。ところが、どういう事情かよくわか



図13 観心十方界図

らないですが、江戸時代になって観心十界図が復興するようです。

江戸時代には「心」を中心円内に書き、下半分に地獄・餓鬼・畜生・修羅・人の五道と、上半分に天人・声聞・縁覚・菩薩・仏の天人と四聖の、いわゆる十界を表した観心十界図の版本画が、随分とつくられたようです(図13)。

それがいつ頃まで遡るのかわかりませんが、いままで見えてきた『天竺別集』や『仏祖統記』に収録された(円頓)観心十法界図」に由来することは間違いありません。

しかし、日本では、観心十法界図の意味や役割が大きく変化、変質していきます。観心十法界図が観心十方界図となつて、「法」の字が「方」の字となつたりしますが、一番大きな変化は阿弥陀信仰と深く関わるようになることです。版本の「観心十方界図」を見ますと、上に勸化文が書いてあって、人々に仏道に入ることを勧める文章があり、下に「心」を表して、その周囲に六道と四聖の図を大円内に表しています。そして、その外側四隅に「唯心偈」の文字が記されています。

「唯心偈」というのは、「もし人、三世一切の仏を了知せ

生死輪(六道輪廻図)から観心十界図へ(宮治)

んと欲せば、まさに法界の性を一切唯心が造ると観ずべし」という偈文で、この世の本質は心がすべてつくり出していくのだという、『華嚴経』「十地品 第六現前地」に説かれる言葉です。唯心偈を唱えると地獄から救済される、「破地獄の偈」として信仰されました。

この「観心十方界図」の勸化文には、「六道界の苦果を離れ、一仏界の浄楽を得るは、極楽往生を願うより直捷なるはなし」とあって、「唯心の浄土」を信じることによって、「決定往生」は疑いなしと記されている。ここでは中心円と外円、および十界を区切る波状は線ではなく、すべて圏点で表され、念仏を唱えた回数でそこに墨を塗り、百万遍を唱えたといわれます。「観心十方界図」を前に、念仏を唱えることによって、浄土に往生ができるという信仰へと変化していったことがわかります。

十一、熊野観心十界図

最後に「熊野観心十界図」についてお話ししたいと思います。「熊野観心十界図」の成立は室町時代と見られています。江戸時代を中心に、熊野比丘尼が絵解きをしなが

ら勸進し、広められました(図14)。

画面上方、中央に「心」という字がやはり円内に書かれ、いままで見てきた観心十界図と関係があることがわかります。ただ、ここでは、下方に地獄・餓鬼・畜生・修羅の苦しみの世界が描かれ、上方には「心」字の下に施餓鬼棚があり、その周囲に人道・天道・縁覚・声聞・菩薩・仏を表し、全部で十界が描かれています。

画面の下方の地獄の描写が詳しく、「血の池地獄」「不産女地獄」「両婦地獄」などが見られ、「賽の河原」と地藏菩薩、餓鬼道や修羅道など、六道絵の伝統が色濃く入っています。これに対し、天・縁覚・声聞・菩薩・仏は観心十界図の伝承を取り入れています。

興味深いのは、「心」の上に半円状に坂道が描かれ、そこに人間が順次歩く様子を描いています。「老いの坂」といって、向かって右の鳥居の下に生まれた赤ちゃんが表され、そこからだんだん坂道を上って行くにしたがって、人が成長をしていきます。サクらの花が咲いて、若々しい姿が見られます。壮年になるとマツが生い茂ってきて、坂の頂上にいます。しかし、やがて老人になると秋のモ



図14 熊野観心十界図 山形・大門寺

生死輪（六道輪廻図）から観心十界図へ（宮治）

ミジが目の前に表され、だんだん死が近くなると腰がかがみ、樹も枯木となっています。私もいまこの辺りの時期ですけれども。その下は冬景色です。

「老いの坂」図は、室町時代に成立したとみられますが、人間の一生を山に登って下るのに喩え、その山道には

サクラとか青葉とかモミジとかを表し、下には少年・青年・壮年・老年の様子が描いてあります。こういう興味深い絵があり、それを取り込んでいます。

「熊野観心十界図」の最後、左の鳥居のところでは、亡くなるときに、待ち構えているのは閻魔様で、浄玻璃鏡のぞき、その人の前世が映し出されています。うそを言っても駄目です。悪事を働いた人は、みんな針の山に追いつてられたり、獄卒に串刺しにされたりする。そういう苦しみの世界が待ち受けています。

下方の地獄の表現ですが、日本人は地獄の表現が得意というか、好きというか、釜ゆでや火あぶりにあつたり、岩山に押しつぶされたり、美女がいて木に登ろうとすると葉が刀となって傷だらけになる葉刀樹とか、実にこまごまと地獄の様子が描写されます。しかし、賽の河原や三途の川の向こうではお地藏さんが助けてくれます。

そして、「心」の上には阿弥陀如来と観音・勢至の両菩薩が表され、最終的には阿弥陀如来の救いがあることを示しています。熊野観心十界図も、阿弥陀信仰と深く結びついていたことがわかります。

生死輪(六道輪廻図)から観心十界図へ(宮治)

以上、インドから日本まで生死輪の図像を追跡しながら、それが禅定僧の観想や『華嚴経』『十地品』の「三界唯心」の思想と関わって変容し、さらに宋代の天台宗において観心十界図へと転換を遂げ、日本へと伝来し、日本ではさらに浄土信仰と融合する様子をお話ししました。仏教美術を通して、仏教が民族や時代を超えて変容しつつ存続した様相、「生きた仏教」の一端が少しでも明らかになったとすれば幸いです。ご静聴ありがとうございました。

付記 本稿は平成三十年十一月十五日愛知学院大学で行われた講演のテープ起こしを基に大幅な手直しを行ったものです。

瀧朝子氏、藤能成氏、森美智代氏、山部能宜氏にはご教示を頂き感謝の意を表します。

参考文献

- 梅津次郎「五趣生死輪図に就いて」『美術史』一五・一六合併号、一九五五年(『絵巻物叢考』中央公論美術出版、一九六八年、所収)
- 頼富本宏「ラダック地方に見られる二つの壁画について」『密教学研究』一〇号、一九七八年
- 頼富本宏他『チベット密教壁画』巽々堂、一九七八年
- 張忠植『高麗華嚴版画の世界』亜細亜文化社、一九八二年
- 平岡三保子「インドの生死輪—アジャンター壁画の作例について—」立川武蔵編『曼荼羅と輪廻』佼成出版社、一九九三年
- 樊錦詩・梅林「榆林窟第19窟目連變相考釋」『段文傑敦煌研究五十年紀念文集』敦煌研究院編、世界圖書出版公司、一九九六年
- D. E. Kimburg-Salter, *TABO: a Lamp for the Kingdom*, Skira Editore, Milan, 1997.
- 腮尾尚子「円頓観心十法界図」についての一考察—図の源流をめぐって—『絵解き研究』一五、一九九九年
- 林雅彦『生死輪』の流伝と絵解き』『絵解きの東漸』笠間書店、二〇〇〇年
- S. F. Teiser, *Renouncing the Wheel: Paintings of Rebirth in Medieval Buddhist Temples*, University of Washington Press, Seattle & London, 2006.
- Monika Zin and Dieter Schlingloff, *Samsāracakra: Das Rad der Wiedergeburt in der Indischen Überlieferung*, Buddhismus-Studien, Düsseldorf, 2007.
- National Museum of Korea ed., *Sutra Painting: In Search of Buddhahood*, (韓国語版) Haebora Printing, 2007.
- 定金計次「アジャンター第17窟の「五趣生死輪」壁画」『アジャンター壁画の研究』中央公論美術出版、二〇〇九年

小栗栖健治『熊野観心十界曼荼羅』岩田書院、二〇一二年
 森美智代「クムトラ石窟第75窟の壁画主題について―ウイグル
 期亀茲仏教の側面―」『美術史研究』五〇、二〇一二年
 龍谷大学龍谷ミュージアム編『絵解きってなあに?』展覧会図
 録、二〇一二年
 山部能宜・赵莉・谢债债「库木吐喇第75窟数码复原及相关壁画
 题材及题记研究」『丝绸之路研究』第一辑、二〇一七年
 橘堂晃一・荒川慎太郎『観心十法界図』をめぐる新研究―西
 夏とウイグルの事例を中心に―『國華』一四七七号、二〇
 一八年

挿図出典

- 図1 肥塚隆・宮治昭責任編集『世界美術大全集 東洋編13 イ
 ンド(一)』小学館、二〇〇〇年、図260.
 図2 S. F. Teiser, 参考文献所引、Fig. 3. 5を基に作成.
 図3 頼富本宏他、参考文献所引、テイクセ寺¹⁰.
 図4 『大チベット展』図録、毎日新聞社主催、一九八三〜一
 九八四年、ツ70.
 図5 森美智代、参考文献所引、図5.
 図6 S. F. Teiser, 参考文献所引、pl. 14.
 図7 林雅彦、参考文献所引、七六頁、図18.
 図8 National Museum of Korea ed., 参考文献所引、図24.

生死輪(六道輪廻図)から観心十界図へ(宮治)

- 図9 梅津次郎、参考文献所引、挿図5.
 図10 橘堂晃一氏提供.
 図11 橘堂晃一・荒川慎太郎、参考文献所引、挿図2、4.
 図12 『新纂大日本統藏経』五七冊、一九七五年、二七頁.
 図13 龍谷大学龍谷ミュージアム編、参考文献所引、図一一九.
 図14 小栗栖健治、参考文献所引、図版6.